

再生の実験タウン「中崎町」(大阪市北区)

大阪の町屋は、江戸時代にできた都市型の住まいで、都心近くで快適性合理性を追求した居住空間であり、明治以降も改良されつつ継承されてきた。戦災でこれらの町屋の大半は失われたものの、奇跡的に被害を免れた地域には、今でも町屋や路地が残っている。その住空間としての質の高さ、生活の知恵や路地の暮らしの贅沢さなどが見直され始めた。それと同時並行で、若いクリエイターなどが、古い町屋を改修してサロンやカフェ、雑貨店などを営むなど、自らの活動拠点とする動きが目立ってきた。その個々の拠点をつないだアートイベントなども行われ、ただ古い町だと思っていた地元住民と若者との出会いによって、まちや人々が少しずつ変わり始めている。

本稿では、数ある動きの中から大阪市北区の中崎町での例を紹介する。

戦前の姿を残す中崎町

阪急梅田駅から北東へ約五百メートル、徒歩では十分ほど。ロフトや毎日放送がある茶屋町を抜けてJRの高架をくぐると、急にまちの様相が変わる。中崎町。北区中崎一～三丁目、中崎西一～四丁目、万歳町、などの一帯がこう呼ばれている。古い木造住宅、少し傾いているようにも見える長屋、狭い路地、お地蔵さん、小さな商店など、ひと昔前に戻ったような静かな町並みが続いている。百年近い歴史をもつこのまちは、戦災をくぐりぬけ、今でもその形をほとんど変えていない。ゆるやかなカーブを描いた道は、運河や川筋をそのまま残している。もちろん長屋の改修や建て替え住戸、新しい高層マンションもあるが、まちそのものは、昔に戻ったかのような、静かで独特のあたたかさをもったたたずまいである。ただ実際のところ、地元の住民は高齢化が進み、子供の数も激減している。市立済美小学校の校区であるが、将来北天満小学校と統合されて学校が移転する計画があり、まち自体の活気はなくなりつつあった。

ところが、最近少しずつその様相が変わってきた。使用されないままの倉庫や空家などを借りて、画廊、雑貨店、カフェやレストランなどを始める若者がぼつりぼつりと増えてきている。梅田から徒歩圏内の立地で、賃料が安いというのが直接の理由であろうが、高層ビル群が間近にそびえるにもかかわらず、昔と変わらない時を刻んでいるようなまちの空気や住空間に活動意欲を誘発されたクリエイターも少なくないだろう(以前は、阪急梅田駅前の茶屋町にその可能性があったが、今や昔ながらの住空間としての町並みも失われた上に、どちらかという金銭的に豊かではない若者たちが小さな店舗を構えたり表現活動をする場を借りるには、手がでないほどの賃料になっているという背景もある)。

中崎町で小さな活動を始めた店長の友人や、口こみでふらりと立ち寄ったお客さんなど、それまでは見られなかったような若い訪問者の姿が目立つようになってきた。

中崎町アートフェア

そのような個々の活動をつなぐ試みが行われた。昨年(平成十三年)十月六日～八日の三日間、「中崎町アートフェア」が開催された。古い家を再利用した新たな店二十二軒が

協力しあって、その期間中、各々の特別展示でお客さんに楽しんでもらおうという企画である。中崎町はけっして広いまちではないが、路地の奥まったところにある喫茶店や、ぱっと見ただけでは一般の住戸と区別がつかないようなギャラリーもある。どんな店がどこにあるのか、ガイドがないとわかりづらいため、このアートフェアに参加する店を一枚のマップに落とし込み、アピールしたいという目的である。

仕掛け人は、震災後すぐにこのまちで、デザイン事務所と画廊を構え、二店目の「ねこアート 手作り雑貨の店」も営む宮久保忠広さんである。

「平成七年、神戸で被災して新たな場所を探していたが、このまちは梅田から近く、いつか人が集まってくると感じた。中崎町というあまり知られていない場所で、友人たちには大丈夫かと心配されたが、画廊を訪ねてお客さんは来てくれた。古い倉庫を改造したが、その後、同様にして、このまちで活動する人が増えてきた。まちの小さな変化を見ながら、アメリカ村のように十代の子供のまちではなく、大人が来れるようなまちになればいいなと想った。とにかく、まず知ってもらいたい。それで“アート”をテーマに、地域の方や古いまちを好きな方にも是非来ていただけるよう、フェアで地図をみて、各店をまわっていただくことにした。結果、マスコミで取り上げられ、地域の住民の方も、お店に入って話をするが増えた」と語ってくくださった。

アートフェアに向けて、一軒一軒声をかけて参加店を増やしていったという。今年のゴールデンウィークに、第二回目を開催する。「一回目は知り合いのアーティストを呼んで作品展示を行いました。もう少しきちっと作品を見せたい。質の高い展示ができる店に限ってフェアをしたい」と、宮久保さんは準備に余念がなさそうだった。

「天人」(あまんと)における中崎町実験ファイル

戦前の町屋に新たな息吹を吹き込む試みを象徴するかのよう、まちの人との接点も意識したサロン形式の店が立ち上がった。その名も「SALON DE A Man TO 天人」。パフォーマーのJUN(西尾純)さんは、自らの実験的パフォーマンス(身体表現)を模索でき、また内弟子の稽古場にもなる場所として、中崎町に惚れ込んだ。地域のいろいろな人と交流し、自分たちの表現もみてほしいと考え、パブリックスペース、つまり近所の子供からお年寄り、アーティストなど誰でも気軽に立ち寄れるような「公園」のような場所にしよう一念発起、空家を借りて改修したいと大家さんに熱心に申し入れて、ようやく承諾を得たという。

昨年五月から改装開始、「空家再生パフォーマンス」としてその工程を公開した。JUNさんは当初からオープンは七月二十六日だと決めていた。「心の中に流れる時間」を重んじるマヤ暦の元旦にあたる日である。改修結果である作品を動機とするのではなく、そのプロセスの蓄積に喜びを見出したいという想いもこめられている。毎日「改装行為」の後、その状態を地域住民や来訪者に開放しライトアップして語り合い、次なるプランニングを進めた。利用者のリクエストも取り入れ、表現者のための舞台や写真の暗室、洋式トイレの設置、バリアフリー、朝食サービスなどが決まった。

この改装のさらなる特徴は、壊した建材を選別して利用し、材料を買わず、ゴミを一切出さない「百パーセントリサイクル」の過程を地域の方に公開することで、それ自体をバ

パフォーマンスとして位置づけたところにある。表に「これはパフォーマンスです、どうぞご覧ください」と書いておいたところ、通りかかった地域の人が「何をやってるの?」とのぞきこんで、後で差し入れやいらなくなった生活用品を届けてくれたりと、結果としてJUNさんは、改装中は地域の人たちの差し入れだけで生きていけた。机や椅子、座布団から調理用具まで、地域の中から発生した不用品やゴミですべてまかなえた。「ゴミ0(ゼロ)」から「地域レベルでゴミの減る改装」である。また、建築や土木、各種設備の専門知識がないJUNさんを見るにみかねた大工さん、電気屋さんや水道工事屋さんなどがかなりの手助けをしてくれた。「こんなにまちの人の応援が得られるとは思っていなかった」とJUNさん。改装の知恵や技術、現実的な設備道具や食生活の面でも、地域の人のおかげがいサポートが場づくりに反映された。オープン直前に手に大怪我をして二十六針縫う手術をしたJUNさんの入院中も、このまちで出会った有志が必死で作業をして、七月二十六日に開店が実現できたのが、JUNさんにとって本当にうれしかったようだ。その後も、手探りで企画展や小さなイベントを行っている。

昼間、片隅で小学生が宿題をしていて、もう一方の隅では打ち合わせ、入り口付近でおばあちゃんが世間話をしているということもよくある。夜はアーティストからサラリーマンまでいろいろな分野の人が集まり熱く語りあっている。「天人」というのは、天下人の意味。このパブリックスペースから世の中へ飛び出し、それぞれの世界で第一人者として活躍してほしいという願いがある。傷ついて帰ってきてまたここで意気を養ってまた戦いに出る、という大家族さえイメージさせる「場」のあり様を追求したいと理解した。

計画としては、中崎町実験ファイル<その>が、場所の再生。当初はできるかどうかもわからなかったという。オープン後の実験ファイル<その>が、「天人」へ来た人が再生される「再生サロンでの再生」。そして<その>として、主従の関係がない学びの場としての可能性。この夏、オルタナティブスクール(私塾)として、世界から交換留学生を受け入れることが決まっている。授業料はなし、点数をつけない、人に順番をつけない、いつまでいてもいい、という次世代の学校への模索を行う。JUNさんは、「今年の二月に訪れたタイでのオルタナティブスクールでは、子供に対してただ叱るのではなく、何がどういけないのか、あなたは何をしたいのかを聞いてくれて、他の方法も教えてくれる。心に響く、教育 響育(きょういく)だった。天人も、そういう場にできると思った。」

現在は実験ファイル<その>の段階だが、JUNさんは自分が一番再生されたと語る。「正直、最初は地域の活性化なんてどうでもよくて、ただ、自分の活動拠点が欲しかったのと、歴史と現在が共存した中崎町に魅せられたのですが、その過程で、地域やコミュニティのあり方についてもっと考え学びたいと感じるようになった。ラジオ体操のおにいさん、婦人会のバザーでの大道芸などで地域の方と交流を深めている。今年は五十年以上も続く豊崎宮の夏祭りに獅子舞として参加する予定で楽しみだ。また社会と自然を繋ぐ、“地球生態系への人類の帰還”をテーマにした芸術活動をEarthのEをとって“EART”と呼んでいる。このまちが新たなアート EART 活動の実験場としても文化情報発信できれば、と考えている。」

若いエネルギーと地域との融合

JUNさんはじめ、地域外から活動拠点を求めて中崎町へやって来た若者にとって、も

ともとの地域住民の理解や協力が大きな助けになった。その仲介役を買って出たのが、中崎西町会副会長で地元で印刷業を営む浅野穰一さんである。

「私は昭和十七年に生まれてこのかたずっと中崎町で過ごしています。梅田ターミナル界隈はずいぶん変わりましたが、ここは本当に変わっていない。十年前、茶屋町を抜けてからここまで、夜八時頃でも飲み屋が一軒もあいていない状態だった。まちも人も高齢化して死にかけていたのが、若い人たちが来て私が知っている中では今が一番大きく変わろうとしている」と語る。

新しくこの町で活動しはじめた若い人たちは、ちゃんと挨拶ができるから好感がもてるのだと浅野さんは話す。しかし、もともとの地域住民の中には、よく思わない人もいるようだ。やはり古いまちで拒絶感や排他的な気持ちもあるだろう。「それぞれの考え方や文化をクロスして溶け合わせる、メルティングという試みをしていかないとまちも人もだめになってしまう。それで、私がまちの古さと若い人たちの接点、たしなめ役になろうと思った」。浅野さんは、夜遅くまで「天人」でわいわい騒いでいるのを見て、やはり地域の人と仲良くしてまちに溶け込むには、せめて十一時にはお開きにした方がいいとか、車の音やゴミの始末など、住民への配慮を、JUNさんをはじめ若い人たちにアドバイスをしているという。「時々叱ったりもします。お互いのためになるから。年寄りと子供を大事にしたらすんなり地域に溶け込めるぞ、と教えてあげながら、いっしょに楽しませてもらってます」。

新たなシナリオと実験による再生

「師をまねるものは生き残り、師をかたどるものは死す」と、JUNさんは、得意な格闘技の格言を掲げながら、本質を受け継ぎさらに創意工夫があっはじめて、本当の意味での再生が実現すると語る。まちや木造住宅のレトロな雰囲気は、現代人にとってなぜかほっとできるものであるが、昔のものをそのまま再現するだけでは、文化はそこからは進化しない。ギャラリー、雑貨店、公園のようなサロンなど、若者のクリエイターとしての願望と空きスペースの条件が偶然重なったことを契機に、新たな発想をもって、歴史とアートが融合した実験が立ち上がったのが、中崎町である。

昔と今の、異なる価値観をもつ人や空間が溶け合うには、摩擦も生じる。JUNさんのように前衛的なパフォーマンスを模索する若者が仕掛けた「場」が、保守的なすべての地域住民にパブリックスペースとして自由に利用されるには、まだ工夫の余地がある。が、そこに住民と若者の間に入って世話を焼いてくれる、浅野さんというつなぎ手が、非常に重要な役割を果たし、今後も不可欠の存在になるはずだ。また、喫茶店や雑貨店など個別の小さな試みも、ネットワーキングにより、まちぐるみギャラリーとしてアートフェアを開催したことで、一つの筋書きができあがり、地域住民の理解と協力を得られることになった。仕掛け人を立ちあがらせ賛同者を巻き込み動かしたのは、都心で失ったものと得たものを感じさせる中崎町の底力に支えられた自信かもしれない。

新たなシナリオによる、まち、空き家、そして人の再生。中崎町における実験は始まったばかりである。

写真キャプション

- * 中崎町（1階は改装されてできた「ねこアートと手作り雑貨の店」）
- * 古い町屋や路地が残る中崎町
- * 茶屋町アプローチ、毎日放送、ロフトなど構想ビル群がすぐ近くに見える
- * 「Salon de AManTO」入り口。一見、ふつうの民家と区別がつかない
- * （特になし）
- * カゲロウザ（古道具雑貨店を営む店主は役者でもある）
- * 路地の奥にも喫茶店が。
- * 「Salon de AManTO」内
- * ぎやらりー楽の虫（画廊）
- * JUN さん
- * 浅野 穰一さん